

2020年10月21日

私が中学生の頃まで、家では犬を飼っていません。おぼろげな記憶の中で、思い出せることが二つあります。犬を抱きかかえると体が温かく、心臓の鼓動が伝わってきたこと、そして、祖父が亡くなった日、私の顔を見つめる犬に向かって話しかけながら悲しみを癒やしたことの二つです。

十九日の月曜朝礼では次のような話をしました。



(手話で)「おはよう」「ごいいます」「みなさん」「元気」「ですか」

今日は、アリーナという盲導犬の話をします。盲導犬というのは、目の見えない方、見えにくい方が、行きたい場所へ出かけられるように助ける犬のことです。盲導犬は、目の不自由な方と一緒に電車やバスに乗ったり、お店などに入ったりすることができません。

アリーナは前にお話した、絵本の絵を描いたエム ナマエさんの盲導犬の名前です。ナマエさんは、目が不自由になる前のように、人の手を借りずに自由に行きたい場所へ行きたいと思いましたが、そのために、盲導犬を希望しました。けれども、希望はすぐにはかきませんでした。

盲導犬は普通の犬とは違います。目の不自由な方の生活を支える仕事をしています。目の不自由な方々は、盲導犬の動きを信じて人が多い所、お店の中、車の通る大きな道を渡ったりします。今、日本で約千頭の盲導犬がいるそうですが、盲導犬を希望している方々の数は、それよりもずっと多

いのだそうです。

生まれながらに「盲導犬」という犬はいません。盲導犬になる訓練を受けて、いくつものテストに合格した犬だけが、盲導犬になれるのです。お母さん犬と過ごした後、およそ十か月間、子犬を育てるボランティアの方に預けられます。子犬を預かった方は人間の様々な生活を経験させます。電車や車の音、雨や雪、たくさんの人混みなどを経験させながら、人間と一緒に生活する喜びを味わわせます。そして、一才になると、今度は盲導犬訓練センターで、盲導犬になるための本格的な訓練が始まります。

盲導犬は目の不自由な方の言うことが、きちんと聞けなければいけません。近くに別の犬や猫がいても、ほえられても、じっと我慢します。珍しがって声をかけてきたり、「偉いね。」と頭をなでられたりしても、なにごともないかのように、ただ、目の不自由な方の安全を守り続けます。道路に置いてある自転車や、看板もきちんとよめます。道を渡るときも、周りの人々の様子を見て、止まったり進んだりできなければいけません。人がお店で食事をしているときには、机の下でじっとします。その他にもいろいろあります。これらのことが全部できるようになって、ようやく正式な盲導犬になるのです。

ナマエさんも盲導犬のご主人になるために、二か月以上も訓練センターで訓練を受けました。こうして、アリーナとナマエさんの生活が始まりました。ナマエさんが、目が見えなくなってから六年目のことでした。

それまでナマエさんは、こわくて外へ出かけることができませんでした。でも、アリーナが来てからは、自転車走り、大勢の人が歩いていても自由に出かけられるようになりました。でこぼこ道や電信柱があつても、アリーナとならこわくはありません。そんな様子が※「アリーナと風になる」という本に書かれています。

皆さんが、もし盲導犬を見かけても頭をなでたり、声をかけたりして盲導犬の仕事の邪魔をしないであげてください。道で出合ったら、静かに道を譲ってあげてください。電車やバスで出合ったら、盲導犬が動きやすいように、すき間をつくらせてあげてください。そうすれば、皆さんも盲導犬の仕事のお手伝いができます。

あなたの行動を目の不自由な方は、気づかないかもしれませんが、でも、盲導犬は間違いなく気づいてくれています。

(手話で)「おはなしを」「おわります」



立教小学校では毎朝「わたしたちも困っている人たちのために、少しでも良い働きができますように。」と祈っています。そうして、心を寄せる方向が困っている方、弱い方に向くように、神さまからのお力をいただきたいと願っています。

(立教小学校校長 佐々木 正)

※「アリーナと風になる」

作エム ナマエ  
発行 アリス館